

【生涯学習・文化施設紹介】

沖縄県南風原文化センター

— 歴史と出会う・文化と出会う・生き方と出会う —

渡 邊 洋 子

Haebaru Township Cultural Center, Okinawa;
meeting history, traditional culture, and the lives of people

WATANABE Yoko

2009年暮れ、同年11月3日に新たな場所でリニューアルオープンした沖縄県南風原町立南風原文化センターを訪ねた。地域の民俗芸能活動の復権と発展に尽力してこられた大城和喜館長に再びお会いするとともに、新センターを見学するためであった。

南風原文化センターは、多くのおとなや子どもたちの参加・協力により完成したユニークで立派な外装と、常設展示室（南風原の沖縄戦、戦後・ゼロからの再建、人々の暮らし）、企画ホール、図書室、交流研修室、ギャラリー、映写室などを備えた本格的な総合文化施設として生まれ変わっていた。近くには、沖縄陸軍病院南風原壕（沖縄陸軍病院南風原壕群20号）があり、同センターは4年ほど前から、その一般公開の仕事を担ってきた（この壕は、「ひめゆり学徒隊」約200名の医療活動で知られ、関わった人々は医療関係者約450人、患者は2000人余りで延べ1万명에達した）。また、小学生や高校生の平和交流事業にも力を入れている。

同センターの運営の基本は「1. みんなで創り、みんなを結ぶ、2. 学校や地域・他機関の要求や課題に応える、3. 足元を深く掘り起こし、世界に広がる」であり、この三つの柱は、「1. 資料の収集・記録保存・調査研究、2. 資料・情報の公開と提供、3. 歴史・文化の継承と創造、4. 人と文化の交流」といった多様な事業に見事に活かされている。所蔵資料（開館時点）には、民俗資料（1400点）、考古資料、戦災資料（約600点）、移民資料（約700点）、写真、フィルム、テープ資料、図書資料、南風原町発行の文献資料などがある。新センター開館に際して、「しばらくは新規の展示資料に困らない」（スタッフ）ほど、町民から各種資料が提供されたとのことで、実際はこれらの数字をはるかに上まわると思われる。

仕事納めの慌ただしい中にも拘らず、南風原の沖縄戦の展示を中心にじっくりと見学させていただけたことに、本当に感謝している。展示物はもとより、展示スペースの構成や展示のしかた全体が、新鮮な刺激であり、大きなインパクトであった。沖縄戦の展示というと、ヤマト（「本土」）では固定化したイメージが先行しがちであるが、ここにあるのは、特定の政治的イデオロギーでも、研究者が学術的に手際よく整理し位置づけた歴史像でも、通常の博物館のような「保存」を優先した展示手法でもない。何よりも「人がモノと出会う」空間と「モノとの出会い」であった。戦争の遺物や遺品、証言は、前述のように、ほぼすべて町民の寄付や貢献によるものである。必要に応じて、町外の人々や学識経験者の手を借りながら、町民自身がこ

の空間を手づくりで造り上げたという。町民には入館料が無料であることもあり、中には、空いた時間に何度も足を運ぶ人や終日展示の中で過ごす人も少なくないようだ。

正直なところ、「モノから学ぶ」ことの迫力や「力」が、これほどのものであるとは、大きな衝撃でも驚きでもあった。数々のモノに接する中で、心の奥深くから湧き上がってくる静かな怒りや深い感銘に抗うことができなかった。入り口に足を踏み入れると、ジオラマで再現された沖縄陸軍病院南風原壕の中にタイムスリップした。旧センターにも戦傷者の人形が横たわる寝台などがあったが、ここでは薄暗い壕内が本格的に再現されていた。連なる二段寝台には、包帯を巻いた人形に加え「あなたも横たわってみてください」との貼り紙のある「体験寝台」が置かれている。壕の中で発見された遺物を見ながら奥に進むと、医療器具の乏しい中で手術台に向かう医師と看護師の姿に出会う。壕の外では、沖縄各地に点在する奉安殿、忠魂碑などの模型や写真、町民の体験談が、「大日本帝国」が沖縄の人々をどう取り込もうとしたかを、淡々と描き出していた。他に学童疎開、移民と戦争、県内の戦争遺跡、南風原平和の礎等の展示もある。どれ一つをとってみても、町民が体験した事実のみが静かに示されているのみである。「こう解釈すべき」「こう考えるべき」との方向づけは見られないし、その必要もない。

もちろん、「満州移民」などの原示もあるとはいえ、町民だけの視点だと「被害者」としてのリアリティに偏りがちで、加害者性の自覚が乏しくなる危険性も指摘される。この点は、今後の大きな課題になろう。とはいえ、同センターの内在する可能性は、その多様な事業や取り組みの基盤に、地理風土も伝承芸能も移民も戦争も年中行事も日々の暮らしも、すべてを含み込んだ、広大でゆたかな南風原の文化世界と次世代への希望が共有されていることにあって考えられる。それは、設立理念として掲げられた、次のような「プロローグ」の中に、そしてスタッフやブラジルからの研修生を含む、ここに集う人々の笑顔に集約されていると思う。

南風原は島尻の要。道の要衝。^{かなめ}／南風原の道は、首里から島尻に向かって放射状に延びている。道は文物や文化の往来を生む。／南風原のクサティは黄金森。南風原の文化には、海を持たない農村共同体の中からはぐくまれた伝統と、島尻共通の顔を首里の顔がある。／南風原は、歴史のるつぼ。多くの人々の往来がある。泣く泣く移民へ出かけた同胞。村(むら)に壊滅的打撃を与えた沖縄戦。そして、近年急激に膨れ変化する街なみ、海がない自然風土に育まれたおだやかな人々の暮らしも変わる。／私たちは誘う。南風原のタイムトンネルへ。南風原の原点を視つめ、歴史、民俗を確かめ現在を問う。／南風原の未来へ向かって。(／は改行箇所。『足もとを掘り起こし世界に広がる南風原の風』、同センター、1995年)

旧センターを初めて訪ねた時の鮮烈な印象も、今回のモノとの出会い、文化との出会い、人との出会い(心の深いところで受け止めた感覚)も、仕事納めの会場で奏でられていた三線の響きも、まさに南風原の歴史と未来を見すえた「今、ここ」の再発見の感動なのであった。

追記：南風原文化センターでは、博物館実習を積極的に受け入れているとのことである。

<http://www.town.haeburu.okinawa.jp/hhp.nsf/0/F2374B0A15DE4EEA492575520025804C?OpenDocument>